

商業地空間における来訪者の回遊行動に関する研究

— 街区構成による界限の分類を通して —

A STUDY ON THE MOVEMENTS OF VISITOR'S WALKING OF THE COMMERCIAL DISTRICTS

— THROUGHOUT CLASSIFYING OF THE LOCALITY BY BLOCK COMPOSITION —

都市計画研究室 植平 健

本研究は、商業地における来訪者の回遊行動と空間構成の関係について明らかにすることを目的とし、クラスター分析を用いた街区構成から見た界限の分類を通し、3地区における追跡調査の結果と国総研の提案した空間分析指標を用いて、通過回数・店舗立ち寄り回数に関する重要な街路の数値的評価を行った。特徴の異なる街において、どの街路が来訪者の回遊行動に与える影響が大きく重要であるかを明らかにし、回遊性向上へ向けた施策づくりの指針を示した。

This study is intended to clarify the relationship between the movements of visitor's walking and spatial structure in commercial districts. Through the cluster analysis, classify of the locality by block composition and evaluate the important street regarding the time of passing through the street and the time of dropping on store by the result of the follow-up survey and indicators "Ministry of land infrastructure, transport, and tourism" is created. Reveal which street is important to the movements of visitor's walking of the different town. And indicate the guide of the measure to improve pedestrian strolling.

0. 研究の概要

0-1. 研究背景・問題意識

これまで中心市街地は新たな経済活動や文化活動を生み出し、地域社会の核となる等、様々な面で都市の重要な役割を担ってきたが、近年、インターネットショッピングのような店舗空間を必要としない購買行動やモータリゼーションの進展、郊外型大型ショッピングセンターの台頭、中心市街地へのアクセス環境の悪化等により、既存の都心商業施設の空き店舗増加やそれに伴う商店街の魅力の低下が問題となり、商業地を歩行者が楽しみながら回遊する姿が減少している¹⁾。これに対し、街が区画整理等の計画前から複雑な街路形態を活かしたり、街路を計画的に複雑にしたりすることで、歩行者の好奇心を刺激し、高い回遊性や適度な滞留を生み出し、商業地での滞在時間の増加を促し、客単価の増加やリピーターの増加を引き起こすことが中心市街地の活性化につながると期待されている²⁾。また、回遊性の向上は中心市街地活性化の手法として、多くの地方自治体や地域等の団体で取り組まれている。

歩行者重視の中心市街地づくりは、世界の潮流であ

り、歩行者空間を充実させ回遊しやすい市街地をつくることは、交通、景観、文化振興等多くの観点から注目されている³⁾。日本の多くの都市は近世城下町を礎とする都市が多く、複雑な街路構成を有するため、現代のライフスタイルに合わせた街の機能更新は難しいが、潜在的に魅力を有しており、その街ならではの将来があると考えられる。

中心市街地活性化手法として多くの自治体で回遊性向上が挙げられているが、回遊行動の実態はいまだ明らかでなく、活発な回遊行動を促すためには、都市空間における店舗等の配置、歩きやすさ、街並みの魅力、歴史等、都市空間の構成に関する多面的な検討が必要である。回遊行動を「ある範囲内での歩行と立ち寄り、滞留の連続」と定義すると、図0-1のように様々な要素間の関係が考えられる。

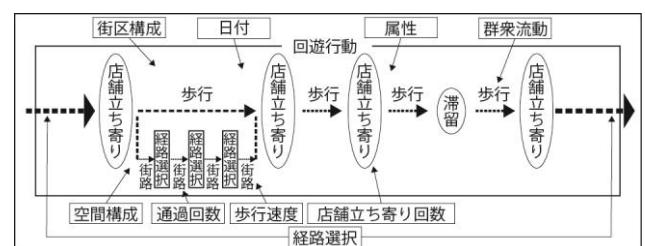


図 0-1 回遊行動の定義

0-2. 研究目的

本研究では、日本の多くの都市がもつ歴史性や迷路性を有する街に着目し、街区構成による分類を通し、追跡調査と街路空間構成評価を行うことで、来訪者の回遊行動と空間構成の関係を明らかにし、回遊性向上へ向けた空間づくり、施策づくりの指針を示すことを目的とする。

0-3. 研究の方法及び構成

研究の方法及び構成を以下に示す。

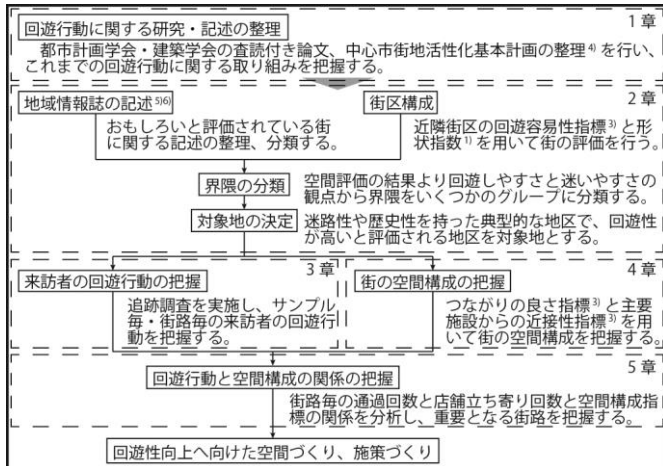


図 0-2 研究の方法及び構成

0-4. 研究の位置づけ

商業地における来訪者の回遊行動に関する一連の研究に本研究は位置づけられる。田村ら¹⁾の研究では新たに迷路性という定義をし、迷路性のある商業地の魅力を景観要素、歩行者、事業者の3つ面から利点を明らかにした。高橋ら²⁾の研究では下北沢において商業集積地の店舗のひしめき合いを独自に定義した店舗数密度により定量化し、回遊行動を追跡調査し、それぞれの要素の関係を明らかにした。高山ら³⁾の研究ではスペース・シンタクス理論を用いて、「奥行き」で通りを評価し、業種、情報発信店舗、通過交通量との比較検証を行い、「奥行」のもつ魅力が歩行者の回遊に与える影響を明らかにした。朴ら⁴⁾の研究では追跡調査方法を修正し、回遊単位概念を用いることで中心市街地における歩行者回遊行動の詳細な実態と都市空間構成との関係を調査・分析し実際歩行距離での集客拠点間距離と配置の重要性、通り抜け路の重要性、歩行主軸だけでなく補助軸、つまり裏道の重要性などを明らかにした。

本研究では、複数の街を対象に街の持つ魅力となる空間構成を国土交通省の定めた指標を用い評価し、さらに追跡調査を実施し、サンプル毎・街路毎の来訪者の回遊行動を把握することで、既往研究で挙げられていた課題を補完するとともに、回遊性向上へ向けた施策づくりの指針を示すことに特徴がある。また対象地の選定において、雑誌を用いることで一般的におもしろいと評価されている街を対象とした。

1. 回遊行動に関する研究及び記述

1-1. 回遊行動に関する研究

これまで行われてきた 29 の回遊行動に関する研究は、大きく「空間構成」、「モデル化」、「交通」、「経路選択」、「行動特性」に分類でき、近年の傾向は、「空間構成」や「行動特性」に関する研究が多くなり、現地の状況を把握し、評価する研究が多く行われている。しかし、独自の指標を用いることが多く、比較研究としての事例数に欠け、独自性が強いいため他の地域で適用しにくいことが問題である。また他の分類を兼ねるような研究が少なく、それぞれの関係が明確ではない。

1-2. 回遊行動に関する記述

2015年1月23日までに中心市街地活性化基本法に基づき、120市162の中心市街地活性化基本計画が全国で認定されてきた⁴⁾。

抽象的な記述が多く見られ、どこを整備したらいいか、どんな施設を建てればいいのか、どんな効果が見込まれるか等の事前調査・予測が難しいことが原因と考えられ、容易に事業効果を推し量れる指標や、現状把握の目安となる指標が必要であると考えられる。

2. 地域情報誌の記述と街区構成による境界の分類

2-1. 地域情報誌の記述

関西の文化情報を記した地域情報誌の内、「Meets Regional」と「Hanako WEST」より、来訪者の回遊行動の様子と街の空間に関する記述を抽出した。96の地域に関する記述から都心部の商業地に関する記述がなされていたものとして28地区を選定した。以下に示す。

表 2-1 都心部商業地

no.	街の名前	no.	街の名前	no.	街の名前	no.	街の名前
1	福島	7	神戸・三宮	13	新町	19	中崎町
2	栄町	8	北浜・淀屋橋	14	堀江	20	北野
3	天満	9	大阪・幸町通	15	京橋	21	岡本
4	阿倍野	10	なんば	16	鶴橋	22	御所南
5	天王寺	11	南森町	17	旧居留地	23	先斗町
6	本町	12	京都駅周辺	18	木屋町	24	トアロード
						25	三条通
						26	錦小路通
						27	茶屋町
						28	元町

2-2. 近隣街区の回遊容易性指標の概要

近隣街区の回遊容易性指標とは、街区の大きさに着目した回遊しやすさを表す指標である。街区の小さいエリアでは経路の選択肢が多く小さいループ状の動線ができ、楽しく回遊することができる。逆に大きいと賑わいの連続性に対する障壁となることが多いと考えられる。本指標では、歩行者の経路で囲まれた範囲を「街区」とし、その面積を指標としたものであり、この面積が小さいほど楽しく回遊できるエリアであるとしたものである。

2-3. 形状指数の概要

形状指数とは、エリア内の街区の形状に着目し、その形状の複雑さを定量化し迷いやすさを表す指標である。複雑な形状の街区の集まりほど小さな値をとり、迷いやすい街区構成であることを示す。図 2-1 に計算方法を示す。

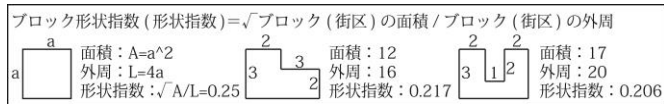


図 2-1 形状指数の計算方法

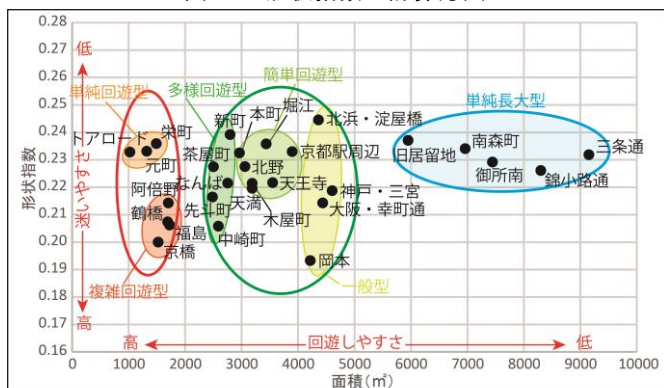


図 2-2 境界の分類

表 2-2 各クラスターの特徴

クラスター大分類	特徴	クラスター小分類	特徴
クラスターⅠ 回遊性・大	回遊しやすさ：高い 迷いやすさ：ばらつき	クラスターⅠ-i 複雑回遊型	回遊しやすさ：高い 迷いやすさ：高い
		クラスターⅠ-ii 単純回遊型	回遊しやすさ：高い 迷いやすさ：低い
クラスターⅡ 回遊性・中	回遊しやすさ：中 迷いやすさ：ばらつき	クラスターⅡ-i 単純回遊型	回遊しやすさ：比較的高い 迷いやすさ：比較的低い
		クラスターⅡ-ii 多様回遊型	回遊しやすさ：比較的高い 迷いやすさ：ばらつき
		クラスターⅡ-iii 一般型	回遊しやすさ：普通 迷いやすさ：ばらつき
クラスターⅢ 回遊性・小	回遊しやすさ：低い 迷いやすさ：低い	クラスターⅢ 単純長大型	回遊しやすさ：低い 迷いやすさ：低い

表 2-3 対象地の概要

	地域情報誌に見られた記述
茶屋町	細い路地や路地裏に店を発見でき、飲食店だけでなくアパレル等のファッションエリアとしても充実した大人の街。買い物しながら新店や路地裏を巡る姿が見られる。
天満	天神橋筋商店街を中心に、個性豊かな飲食店等が点在しひしめいている。昔ながらの長屋や路地等の下町風情も残している。ぶらぶら歩いたり、路地を探索したりと、歩けば歩くほど新たな発見があり、多くの人が回遊している。
福島	細かな路地が入り組み迷路のような街を構成している。町家や長屋も多く残り、リノベーションされた飲食店や上質な飲食店、個人店が点在している食の激戦区でハシゴし回遊する姿が見られる。

2-4. 境界の分類

近隣街区の回遊容易性指標と形状指数をそれぞれ街毎に平均し、クラスター分析⁽¹⁾を行い、3つの大分類と6つ小分類のグループに分類した(表 2-2)。クラスター分析の結果と街毎の散布図を図 2-2 に示す。

2-5. 対象地の選定

本研究では、日本の都市のもつ近世城下町を礎とする歴史性や複雑な街路(迷路性)をもつ典型的な地区として、図 2-2 より比較的回遊しやすく迷いやすい「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」の内、歴史性や迷路性に関する記述が多く見られた茶屋町、天満、福島(表 2-2)を対象に以降の研究を行う。

3. 来訪者の回遊行動の把握

3-1. 追跡調査の概要

追跡調査の概要を表 3-1 に示す。また属性をそろえるため、買い物時間や行動率の高い「女性」、また住民の追跡を避け来訪者を選ぶために「二人組以上」の両属性を含む「女性を含む 2 人以上のグループ」を調査対象として追跡調査を実施した⁽²⁾。

3-2. 追跡調査の結果

追跡調査の結果を表 3-2 に示す。また、各地区のサンプル毎の結果を表 3-3 に、属性の違いによる回遊行

表 3-1 追跡調査の概要

調査対象	女性を含む 2 人以上のグループ。
調査範囲	北区茶屋町(茶屋町)、福島区福島 5 丁目(福島)、北区天神橋 5 丁目(天満)
調査日時	茶屋町：2012/11/4(日)、24(土)/10:00~20:00 福島：2014/11/22(土)、23(日)/10:00~20:00 天満：2014/11/15(土)、16(日)/10:00~20:00
開始条件	調査開始時間後に最初に START の位置を通った歩行者から調査を始める。以降は終了条件に対応する再開条件に従う。
終了条件	①施設に入る。 ②調査対象範囲から出る。 ③歩行者が自転車や交通機関を利用する。 ④対象の人数が変化する。 ⑤10分以上の滞留。
再開条件	①追跡終了時の施設から出てくる人から追跡再開。 ②追跡終了時と同じ道路から調査対象範囲に入ってくる人から追跡再開。 ③④⑤ START 地点に戻って追跡再開。 再開条件①②の場合に、10分経過しても次の調査対象が現れない場合は START に戻り、最初に START 地点を通過したグループから追跡を再開する。

表 3-2 追跡調査の結果

場所	茶屋町	天満	福島
実施日	11/4(日) 11/24(土)	11/15(土) 11/16(日)	11/22(土) 11/23(日)
サンプル数	79 169	88 179	88 160

表 3-3 各地区のまとめ

街	回遊距離(m)	回遊時間(s)	回遊速度(m/s)	滞留時間(s)	最短経路的中率	引き返し
茶屋町	192.23	185	1.10	2382	77.1%	12
天満	151.89	166	0.96	49	87.6%	12
福島	181.17	163	1.13	431	83.4%	8

表 3-4 属性の違いによる比較結果

項目	傾向
回遊距離	女性の割合が高いほど長距離の回遊をする。
回遊時間	人数が多いほど長時間の回遊をする。
回遊速度	人数が多いほどゆっくり街を歩いて回遊する。
滞留時間	人数が多いほど、女性の割合が高いほど長く滞留する。
滞留ゆめき	回遊速度と同様。滞留の影響は小さい。
最短経路的中率	人数が多いほど遠回りする。
引き返し	女性の割合が高いほど多く見られる。

動の特徴を表 3-4 に示す。

3-3. 来訪者の回遊行動の把握

追跡調査より、街路毎の歩行速度、通過回数(通過)、店舗立ち寄り回数(立ち寄り)を把握した。

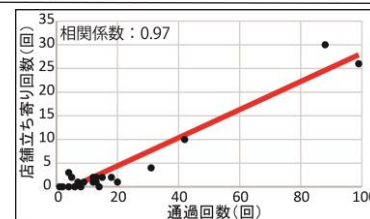


図 3-4 通過と立ち寄り(天満)

通過回数(通過)、店舗立ち寄り回数(立ち寄り)を把握した。これより、各地区における来訪者の回遊行動の主軸・補助軸を構成すると考えられる街路群と特に立ち寄りが多く見られた街路(立ち寄り)を図 3-1 から図 3-3 に示す。また、天満において特に強い相関関係¹⁰⁾が通過と立ち寄りの関係(図 3-4)に見られ、通過回数が増加するほど店舗立ち寄り回数が増加することがわかった。

4. 街の空間構成の把握

4-1. 『賑わいづくり施策「発見」マニュアル』の概要

『賑わいづくり施策「発見」マニュアル』³⁾は国土交通省国土技術政策総合研究所都市研究部都市施設研究室(国総研)が、賑わいづくりの施策の「発見」につながる効果的な調査・検討手法を提案し、地方自治体や地域でまちづくりに取り組む団体等が連携して賑わいづくりに取り組む際に参考になることを想定して作成したものである。

中心市街地の賑わいづくりにより市民の経済活動を活性化することは、行政サービスの点において効率的であるだけでなく、地域の魅力向上や、社会・文化的な水準を高める上でも有効であると考えられ、全国で賑わいづくりの施策づくりが行われているが、それらがどの程度の効果を生んでいるのかについては明確な

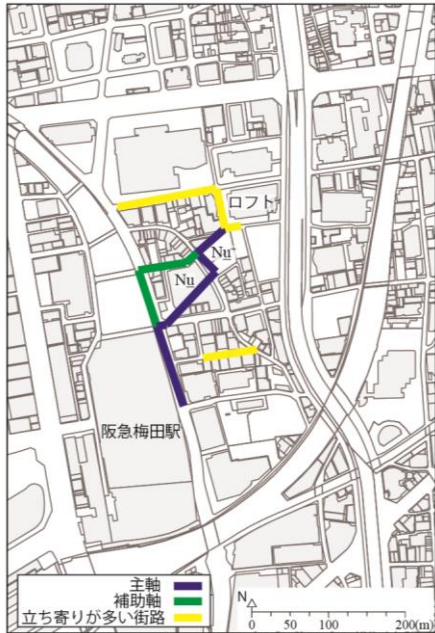


図 3-1 主軸・補助軸（茶屋町）



図 3-2 主軸・補助軸（天満）

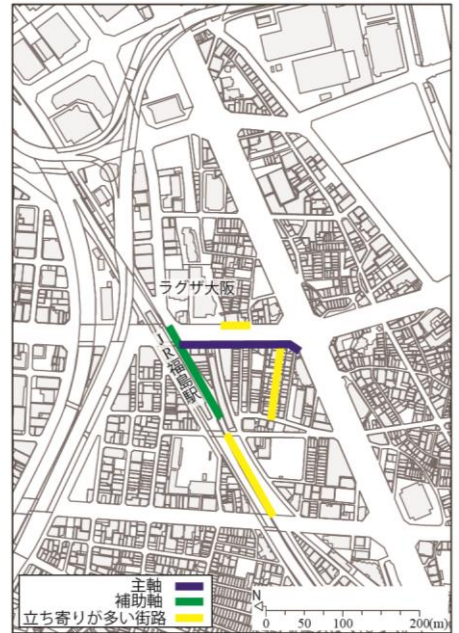


図 3-3 主軸・補助軸（福島）

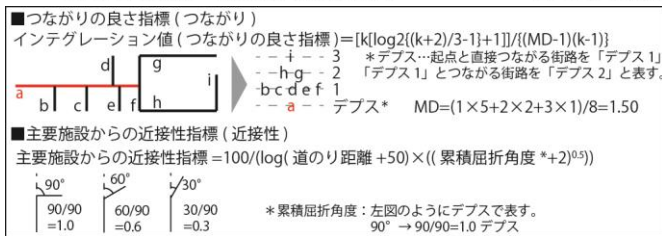


図 4-1 空間構成指標の計算方法

物差しがなく、議論が分かれる原因となっている

4-2. つながりの良さ指標の概要

つながりの良さ指標(つながりの良さ)とは、周囲の街路と近い関係(つながりがある)か、遠い関係(数回曲がらないとたどりつかない)かを示す指標である。軸線図を用い「見える」範囲をひとつの空間として捉え、それぞれの空間のつながりをグラフ理論の考え方のもとにデパス3までを解析範囲とし指標化したものである。図4-1に計算方法を示す。

4-3. 主要施設からの近接性指標の概要

主要施設からの近接性指標(主要施設からの近接性)とは、駅や大型店など、人通りの起終点や目的地になりやすい場所からの近さを表した指標である。実際の道のり距離と屈折角度を組み合わせた人の感覚に近い「近さ」を数値化したもので、軸線図を区間線分図に分割したものをを用いて、賑わいを創出する拠点的な施設からの近さを指標化したものである。本研究では、各地区における主要な駅を主要施設として設定した。図4-1に計算方法を示す。

4-4. 街の空間構成の把握

前述した指標を用いて、各地区の空間構成を把握した。それぞれ図4-2から図4-7に示す。これらより、つながりの良さが1.91以上の(周辺との関係が強い)街路の分布を見ていくと、面的な分布の茶屋町、線的な分布の天満、面的ではあるが中心部は弱い(円環状

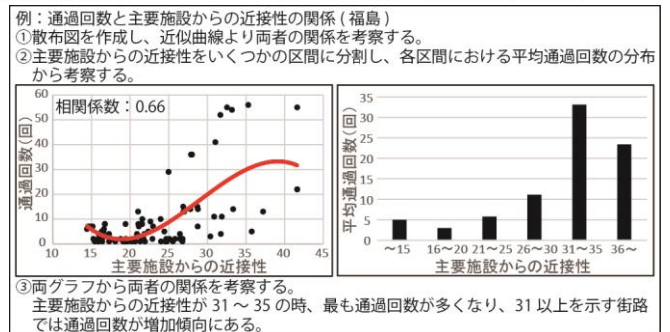


図 5-1 回遊行動と空間構成の関係の分析方法

表 5-1 回遊行動と空間構成の関係

街	来訪者の回遊行動	空間構成			
		つながりの良さ		主要施設からの近接性	
		傾向・ピーク	相関	傾向・ピーク	相関
茶屋町	歩行速度	-	0.16	-	0.19
	通過	「1.91～2.20」で最大	0.51	「31～」で増加傾向	0.39
	立ち寄り	「1.91～2.20」で最大	0.38	-	0.12
天満	歩行速度	-	0.25	「31～35」で最小	0.58
	通過	「1.61～1.90」で最大	0.37	「31～」で増加傾向	0.48
	立ち寄り	「1.61～1.90」で最大	0.35	「31～」で増加傾向	0.47
福島	歩行速度	-	0.18	-	0.22
	通過	「2.21～2.50」で最大	0.47	「31～」で増加傾向	0.66
	立ち寄り	-	0.10	「31～」で増加傾向	0.57

の) 分布の福島と、それぞれの特徴が表れた。

5. 回遊行動と空間構成の関係

5-1. 相関分析

来訪者の回遊行動(歩行・通過・立ち寄り)と空間構成(つながり・近接性)の関係を分析するにあたり、相関分析を行いそれぞれの関連性を把握した。弱い関連性があると言える¹⁰⁾相関係数0.30以上の値を示したものに関して、以降の分析を行う。

5-2. 回遊行動と空間構成の関係

相関分析の結果より、表5-1に示す組み合わせに関して分析を行った。図5-1に例を示す。図5-1に示した方法と同様に各地区の特徴を分析した。各地区における分析結果と5-1で行った相関分析の結果として相関係数を示す。

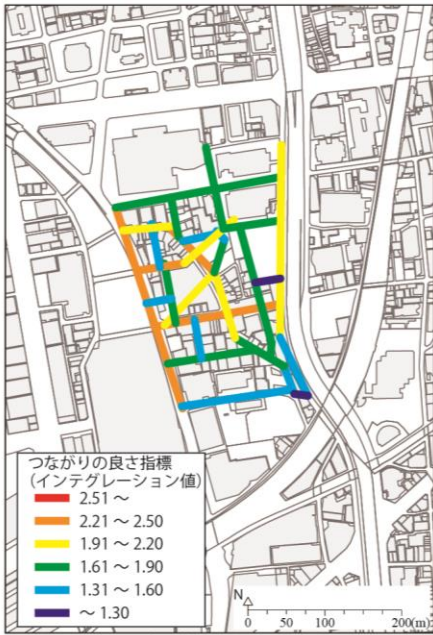


図 4-2 つながりの良さ (茶屋町)

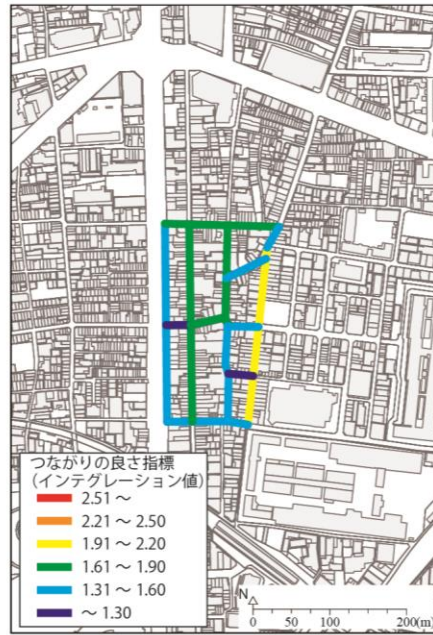


図 4-3 つながりの良さ (天満)

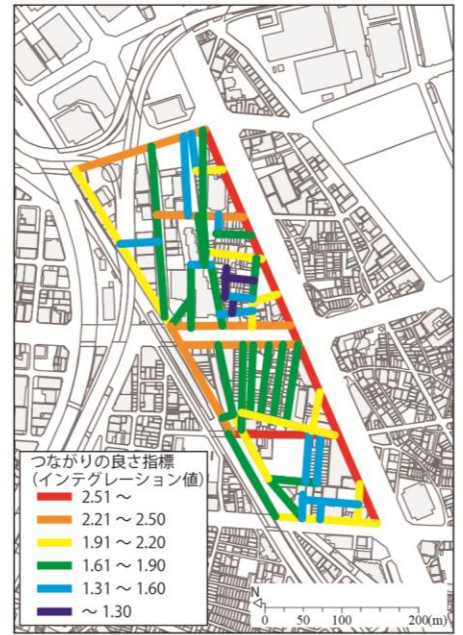


図 4-4 つながりの良さ (福島)

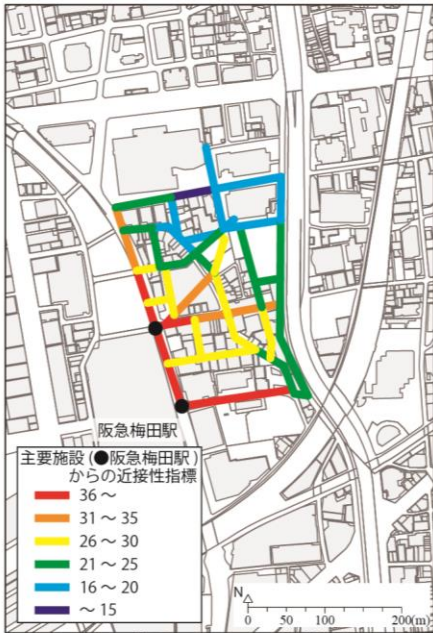


図 4-5 主要施設からの近接性 (茶屋町)

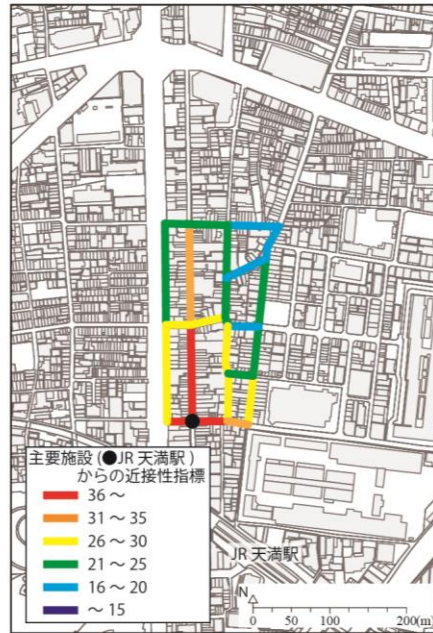


図 4-6 主要施設からの近接性 (天満)

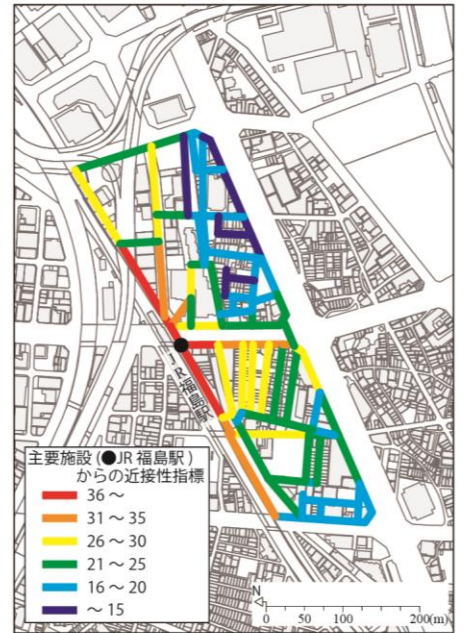


図 4-7 主要施設からの近接性 (福島)



図 5-2 重要な街路 (茶屋町)

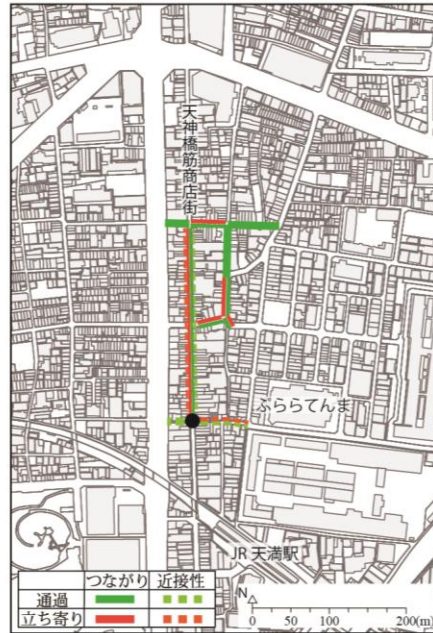


図 5-3 重要な街路 (天満)

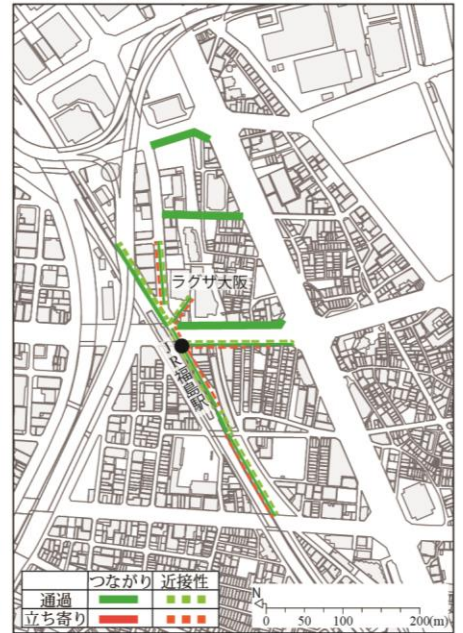


図 5-4 重要な街路 (福島)

■回遊性向上へ向けた施策づくりの指針					①近隣街区の回遊容易性指標と形状指数を求める。			
分類	街	街区構成(特徴)		来訪者の回遊行動	空間構成			
		近隣街区の回遊容易性	形状指数		つながりの良さ		主要施設からの近接性	
単純回遊型	元町	(1000~1500)	0.23付近	×	傾向・ピーク	相関	傾向・ピーク	相関
複雑回遊型	福島	1726.1 (1500~2000)	0.22 (0.21付近)	歩行速度	-	0.18	-	0.22
				通過	「2.21~2.50」	0.47	「31~」で増加傾向	0.66
				立ち寄り	-	0.10	「31~」で増加傾向	0.57
多様回遊型	茶屋町	2503.1 (2500付近)	0.23 (0.20~0.24)	歩行速度	-	0.16	-	0.19
				通過	「1.91~2.20」	0.51	「31~」で増加傾向	0.39
				立ち寄り	「1.91~2.20」	0.38	-	0.12
単純回遊型	天満	3187.4 (3000~4000)	0.22 (0.22~0.24)	歩行速度	-	0.25	「31~35」で最小	0.58
				通過	「1.61~1.90」	0.37	「31~」で増加傾向	0.48
				立ち寄り	「1.61~1.90」	0.35	「31~」で増加傾向	0.47
一般型	岡本	(4000~4500)	(0.19~0.25)	×	×	×	×	×
単純長大型	御所南	(5000~10000)	0.23付近	×	×	×	×	×

- ② ①の分類に照らし合わせて、どの分類に属するかどの街に近い値かを把握する。 → 「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」
- ③ ①の分類に照らし合わせて、どの分類に属するかどの街に近い値かを把握する。 → 「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」
- ③ ①の分類に照らし合わせて、どの分類に属するかどの街に近い値かを把握する。 → 「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」
- ④ ①の分類に照らし合わせて、どの分類に属するかどの街に近い値かを把握する。 → 「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」
- ⑤ ①の分類に照らし合わせて、どの分類に属するかどの街に近い値かを把握する。 → 「複雑回遊型」「多様回遊型」「単純回遊型」

図 6-1 回遊性向上へ向けた施策づくりの指針

つながりの良さに関しては、地区により傾向にばらつきがあったが、主要施設からの近接性は通過・立ち寄り共に 31 以上を示す街路で多くなることがわかった。図 5-2 から図 5-4 に回各地区における通過・立ち寄りに関する重要な街路を示す。

図 5-2 から図 5-4 より、茶屋町、天満、福島における通過と立ち寄りが多く見込まれる空間構成を有した街路の分布が明らかになり、この 3 地区において回遊性の向上を図る場合、これらの街路を計画に組み込むことが重要であると考えられる。

6. まとめ

6-1. 結論

- 本研究では以下のことが明らかになった。
- これまで行われてきた回遊行動に関する研究成果と課題、及び中心市街地活性化基本計画における回遊性向上へ向けた取り組み。
- 地域情報誌より抽出した 28 地区において、街の街区構成に着目し、回遊しやすさと迷いやすさの観点から 6 つにグループに分類でき、それぞれのグループの特徴を把握した。
- 追跡調査より、茶屋町、天満、福島における来訪者の回遊行動をサンプル毎と街路毎に把握した。また属性による回遊行動の特徴を明らかにした。
- 通過回数が増加するほど、店舗立ち寄り回数が増加する傾向にあること。
- 国総研の作成した指標を用いて、各地区の街路の周辺の街路との関係の強さと主要施設から感覚的にどれだけ近いかを明らかにした。また、各地区における周辺との関係が強いエリアの特徴を明らかにした。
- 来訪者の回遊行動(通過・立ち寄り)を促す空間構成指標の傾向を明らかにした。
- 回遊性向上へ向けた施策づくりの指針として図 6-1 に示す手順を経ることで、その街にとってどの街路が回遊性の観点から重要であるかを示した。

6-2. 今後の課題・展望

- 今後の課題・展望として以下が挙げられる。
- 境界(街)の分類において、形状指数を用いたが、

街区の形状だけでなく配置にも着目した迷路性指標を用いることでより詳細な評価が可能となる。

- 本研究で対象とした以外にも、多くの街で同様の調査を行うことにより、精度を高め、回遊性向上へ向けた施策づくりにより貢献できる。
- 回遊行動の内、滞留に関する調査、分析が不十分であり、より検討する必要がある。
- 本研究で用いた空間構成の指標の他に、より詳細な店舗の分布や密度を評価する指標を用いることで、街の良さを活かした施策づくりにつなげることができる。

【補注】

- ユークリッド平方距離による階層的クラスター分析で、ウォード法を用いて行った。またこの際に excel のフリーソフト「多変量解析総合ソフト(エクセルアドイン版)KTS&C」を用いた。
- 参考文献 3) によると既往の研究から服を試着してからその品物を買う割合は男性が 65%に対し女性は 25%と少ないことが明らかにされている。つまり女性の方が男性より複数の店を巡る回遊行動をとりやすいことが考えられる。また週全体において女性は男性の 26 倍買い物行動を起こすことが明らかにされている。

【参考文献】

- 田村光司、浅野光行(2004)、「迷路性のある商業地の魅力に関する研究」,日本都市計画学会学術研究論文集, No.39-3, pp667-672
- 加藤憲一、山田孝子(2009)、「業種別商業集積地に基づく都心商業地域の回遊行動モデル」,(社)日本都市計画学会都市計画論文集, No.44-2, pp8-14
- 国土交通省 HP, 2015 年 2 月 7 日閲覧, <http://www.mlit.go.jp/index.html>
- 中心市街地活性化協議会支援センター HP, 2015 年 2 月 5 日閲覧, <http://machi.smrj.go.jp/index.html>
- 京阪神エルマガジン社(2010~2014)、「Meets Regional」
- マガジンハウス(2005~2010)、「Hanako WEST」
- 高橋弘明、後藤晴彦、佐久間康富、齋藤亮、石井雄希(2005)、「商業集積地における来訪者の回遊行動と店舗数密度の関係についての研究-下北沢駅周辺地域を事例として-」,日本都市計画学会学術研究論文集, No.40-3, pp649-654
- 高山幸太郎、中井検裕、村木美貴(2002)、「商業集積地における空間の「奥行」に関する研究-下北沢を対象として-」,第 37 回日本都市計画学会学術研究論文集, pp79-84
- 朴喜潤、佐藤滋(2006)、「中心市街地における都市空間構成と歩行者回遊行動に関する研究-歩行者追跡調査結果と回遊単位概念を用いて-」,日本建築学会計画系論文集, No.605, pp143-150
- 菅民郎(2013)、「Excel で学ぶ多変量解析入門 -Excel 2013/2010 対応版-」, pp13-43, オーム社

討議

討議 [日野康雄]

対象地選定に際し、迷路性と歴史性に着目した理由と、歴史性や迷路性の観点から対象とした地区は妥当なのか。

回答

対象地選定に関して、歴史性や迷路性を持った地区を対象に行った理由としましては、研究背景で述べているが、①日本の多くの都市が有する特徴であること、②中心市街地の衰退に対する回遊性向上の取り組みとして、街が計画前から複雑な街路形態を活かしたり、計画的に複雑にしたりすることが挙げられており、中心市街地活性化につながると期待されているためである。

対象とした地区は、地域情報誌において、歴史性や迷路性に関する記述が多くなされており、世間に歴史性や迷路性をもった地区として認識されていると考えられるため、妥当であると考えます。しかし、本研究では①街区構成による分析を行った範囲を雑誌掲載店舗数が最も多かった地区(町丁目単位)としていること、②迷路性の指標として用いた形状指数では街路網の複雑さを表せないため、天満において迷路性が高いとは言えない結果となったと考えられる。しかし本研究では、都心部の商業集積地として抽出した28地区において街区構成評価を行い、クラスター分析の結果が迷いややすい街区構成の集まりの3グループの内、歴史性や迷路性に関する記述の多かった地区を各グループの代表として扱ったもので、妥当であると考えます。街の空間的は迷いややすい構造でも、来訪者の行動は一箇所に集中する形となったにすぎないと考えます。

討議 [内田敬]

図5-2、3、4に関する説明をして欲しい。3章・4章から5章への分析方法を教えてください。図5-2を例にして、この図から何が読み取れるのか。つながりの良さ指標や主要施設からの近接性指標との関係はどうなのか。

回答

3章で把握した来訪者の回遊行動の内、街路毎の歩行速度・通過回数・店舗立ち寄り回数と、4章で把握した街路空間構成指標との関係について分析したのが5章である。図5-1に示すように、散布図と近似曲線から全体の相関と傾向を、度数分布図からどの値の時に通過や立ち寄りが最も多くなると考えられるのかを分析した。その結果として表5-1が導き出される。また表5-1で示した各要素間の傾向より、つながりの良

さ指標が「〇〇～〇〇」を示す街路は、通過回数が最も多くなるという考え方のもと、図5-2～4にそれぞれの地区における、通過や立ち寄りが最大となる街路空間構成指標の値を示す街路をプロットしたものである。街区構成による街の分類をし、街路空間をこれらの指標で評価することにより、どの街路が通過・立ち寄りが多くなるポテンシャルを持っているかを示し、回遊性向上へ向けたより具体的な整備の方針を示したと考える。